

「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」 の歴史叙述

渡部 望

ベンヤミンは「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」¹⁾を完成させると、『社会研究紀要』に掲載するため、ニューヨークに亡命していたホルクハイマーに原稿を送付した。だがアドルノから送られてきたのは掲載拒絶の返事だった。アドルノは1938年11月10日付書簡の冒頭でこう述べている。「さまざまなモチーフは、収集されてはいますが、結論にまで導かれてはいません」²⁾。興味深い素材は収集されているが、それらを統合する理論的解釈が示されていない。ひとつひとつの「モチーフ」は興味深いが、全体として結局何が言いたいのかが読み取れない、ということであろう。

ベンヤミンの落胆は大きかったようで、応答の筆を執ったのは12月9日のことであった。この書簡でベンヤミンは、「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」はボードレール論の第二部として文献学的な素材として書かれたものであり、全体の哲学的基礎は第三部に保留されている。したがって結論は第二部からは展望できないのだと抗弁している。第三部こそ「のちに決定的な脈絡のなかで電撃的な照明を浴びることになる」³⁾ものだと予告するのだが、彼がこれを完成することはなく、その内容を窺い知ることは困難である。

哲学的基礎あるいは理論的解釈が第三章に保留されているということを考慮しても、「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」のとらえどころのなさは変わらない。というのも、作品に支配的な運動は横滑りや、宙づり、旋回であって、結論に向かって進行する方向性を感知することは困難だからである。アドルノの書簡に感じられる苛立ちは、こうした遊戯的なエクリチュールを前にした感情的反応ではないだろうか。この作品のとらえどころのなさは、こうしたベンヤミンの独特のエクリチュールによるところが大きいと考えられる。だが、後に見るような「類似」「媒介の欠如」「多義性」といったエクリチュールの特徴は、ベンヤミンの自覚的な方法意識の産物である。ここではこの作品におけるベンヤミンのエクリチュールに注目し、それらを整理することによって、ベンヤミンの問題意識、とりわけ歴史叙述にかかわる問題意識にひとつの補助線を引いてみたい。

類似

「ボエム」と題された第一部で、ベンヤミンはマルクスが職業的策謀家とボエ

ームの親近性を指摘していることを引きながら、「ボードレールの相貌をまざまざと思い描くということは、ボードレールとこの政治的人間類型とのあいだに見られる相似について語ることにほかならない」(p.78)と述べる。そしてそこからボードレールの「似たもの探し」を開始する。

ナポレオン三世はボエーム的環境で身につけた策謀家めいた慣習をまとしており、その「不意打ちの布告と秘密好み、急な攻勢と真意の測りがたい皮肉」(p.81)といった特徴は、ボードレールの理論的著作にも見出される、とベンヤミンは言う。ボードレールは検討が必要なときであっても、議論など無視して自分の意見を断定的に提出する。それらが矛盾しているときにでも、「食い違いを媒介するという努力をほとんどしていない」(p.81)。この点でボードレールはナポレオン三世と似ているというのである。さらに「類似」は展開する。ボードレールは口汚さにおいてジョルジュ・ソレルとセリーヌに似ている。「屑屋の葡萄酒」の屑屋は詩人であると同時に、下層職業的策謀家を含むボエームと共通点をもっている。反逆詩編のサタンやカインはブランキの相貌を思わせる。だがボードレールのサタンは上層ブルジョワジーの代弁者という別の側面をも持っている。

「類似」という導きの糸に導かれて、ボードレールの新たな側面に光を当てたベンヤミンの着眼点には驚嘆するしかない。だが、このような展開に不安を覚えるのもまた真実である。「類似」によってキャンバスが一色に塗りつぶされていくと、差異の欠如による方向感覚の喪失を覚える。そもそも類似による類推は修辞技法であって、論証技法ではないのではないか。

ここでもしもベンヤミンがボードレールとブランキではなく、ボードレールとブルードンを結びつけようとしていたらどうなっていたかを想像してみよう。ボードレールとブルードンは個人的なつながりや思想的な影響関係も確認されており、かねてから論じられていることの多い二人である。両者を論じるとすると、必然的にそこでは比較が行われる。つまり「類似」と「差異」による相対的位置の明確化である。比較は詩人と革命家の位置づけが定め、同時代における政治と芸術の論点のありかを明らかにするだろう。こういった作業こそ、ベンヤミンが行わなかったことである。いわば思想の空間的認知を可能にする作業に、ベンヤミンは背を向けているのである。対象から距離を置き、あたかも地図上の対象を観察するようにボードレールを時代のなかで描きだすこと、そのような行為を拒絶しているのである。ベンヤミンが何を行ったのかを確認するために、何を行わなかったのかを、何に背を向けたのかに注目する必要がある。

媒介の欠如

ボードレーがナポレオン三世と似ているという根拠として、ベンヤミンは次のような点を挙げている。

ボードレーは自分の意見をたいてい、有無を言わさぬ口調で語る。議論など知ったことではない。いくつもの命題を次々と自分の意見として提出し、それらがまったく相矛盾することになり、きびしく検討することが必要なはずのときでも、議論を避けてしまうのだ。……こうしたすべてにおいてボードレーは読者公衆に対して、食い違いを媒介するという努力をほとんどしていない。
(p.81)

ボードレーは理論的著作においては結論を断定的に述べる。そこでは議論や媒介といった結論を導くまでの考察過程、論証過程を省略する。この点で、理由を示すことなく不意に政策を変更するナポレオン三世と類似しているというのである。ところで先に紹介したアドルノの書簡には次のような興味深い一節がある。「私のひどい思い違いでなければ、あなたの弁証法にはひとつのものが、媒介が、欠けています」⁴⁾。媒介の欠如。ベンヤミンがボードレーの理論書に関して述べた特徴を、アドルノはベンヤミン論文の欠点として批判しているのである。

正確を期すために言っておくと、アドルノはベンヤミンの論証すべてについて媒介が欠如していると言っているわけではない。上部構造と下部構造を結びつける議論に関して批判しているのである。アドルノは先の引用に続いて、具体的な個所を示している。

どこまでも支配的な傾向は、ボードレーのプラグマティックな諸内容を、かれの時代の社会史の手近な諸特徴に、しかも可能な限り経済的な種類のものに、直接に関係づける傾向です。私の考えでは、たとえば葡萄酒税にかんする個所（第一章）や、バリケードにかんするある種の論述や、先にも触れた遊歩街の導入の個所などが、その例です。最後の個所は、私にはとりわけ問題性を感じさせます。なぜなら、まさにここでは、原理的・理論的な考量から生理学を経て遊民の「具体的」な叙述へと至る移行の過程が、脆弱なままに残されていますから。⁵⁾

アドルノは下部構造と上部構造の結びつけ方が安易で、両者の論理的関係が十分

に検討されていないと言っているのである。たとえば、葡萄酒税値上げ（下部構造）という事実とボードレールの詩「屑屋たちの葡萄酒」（上部構造）における葡萄酒礼賛とのあいだの論理的経緯。オスマン以前のパリの舗道の狭さという歴史的事実（下部構造）と遊歩が意義深いものとなったという事実（上部構造）とのあいだの論理的経緯。これが論証されていない。脆弱だ、と言っているわけである。この指摘はなるほど妥当に思われる。だがベンヤミンのテキスト全体をあらためて検討してみると、論理的媒介の欠如は上部構造と下部構造に関する部分だけにとどまらず、この作品全体に支配的な特徴であることがわかる。ひとつの現象ともうひとつの現象とのあいだの論理的な関係を実証的に示そうとする姿勢は希薄である。言い換えれば、ベンヤミンは因果論的論証には意図的に無頓着であろうとしている。

第一部では「類似」が導きの糸として機能していた。これも言ってみれば連想にもとづく論理展開であり、原因と結果の因果的關係から自由な論理展開であった。第二部「遊歩者」にあっては、あたかも遊歩者がパリの街をぶらぶら歩きながら、あちらこちらの店を覗き、通りすがりの人びとを眺めるように、論は展開している。遊歩につれて風景が変化するように、テーマが水平的に変化する。それが垂直方向に深まることも高まることもない。ベンヤミンはあえて因果関係にもとづく論証を拒絶しているかに思えるのである。ベンヤミンはボードレールを評した際の「媒介なし」を、みずからの方法として実践していると考えられるのである。

「媒介」の欠如、因果関係解明への留保について、興味深い個所がある。ベンヤミンはボードレールの芸術理論に論争的な方向性があるとして、こう述べている。

この理論は、歴史尊重主義という灰色の背景、すなわちヴィルマンおよびクーザンによって流行っていたアカデミックな訓誥注釈主義からはっきり際立っている。この理論における美学的考察はどれひとつとして、近代を古代と浸透しあったかたちで描いていないが、『悪の華』のいくつかの詩は、そうしたことに成功している。(p.200)

この「歴史尊重主義」という訳語は翻訳者の意識であり、ベンヤミンは一般的な用語、フランス語訳では *historicisme* と訳される、いわゆる「歴史主義」という単語を用いている。哲学史家ヴィクトル・クーザンと文学史家アベル・フランソワ・ヴィルマンの名をわざわざ出していることから、これは実証主義的歴史主義を指していると考えられるべきであろう。ボードレールはこの二人を個人的な理由で嫌っていたが、ベンヤミンはその私怨を歴史理論における対立に置き換えている。つまり一方

に、原因（過去）と結果（現在）を結ぶ軸を想定し、その因果関係を実証的に明らかにすることによって歴史を捉えようとする歴史主義。他方に、ボードレールが詩において実現した、現在と過去が「浸透」しあうものとして表現する歴史理論。この二つの対峙である。ベンヤミンの考えるボードレールの歴史理論についてここで論じるだけの余裕はないが、ベンヤミンの論理展開が実証主義的歴史主義に背を向けたものであることは確認できるであろう。

多義性

ベンヤミンは「火箭」の一節を引用して次のように述べている。

「静かな水の上に、目に見えぬほどかすかに揺れている……あれらの美しく大きな船、のんびりとして郷愁をいづくかに見えるあれらの頑丈な船は、無言の言葉でわれわれに告げていはいはしないか、いつわれわれは幸福に向かって出発するのか？と」。(中略) 彼が沖合の停泊地にいる船たちの劇（光景）に見とれるとき、それはこの船たちからひとつの比喩を読み取るためである。すなわち英雄は、あれらの帆船と同じように強く、明敏で、調和的で、立派な体つきをしている。ところが、外海は英雄にむなしく合図を送るしかない。というのも、英雄の生は凶星のもとにあるのだから。(p.225)

ベンヤミンはボードレールの船の両義的イメージを読み解く。静かな海に穏やかに浮かぶ船体が秘めた潜在的なエネルギー、だがその能力を外海で発揮することのない失意の存在。そのことを指摘した後に、ベンヤミンはボードレールの近代の英雄のイメージを重ねる。近代の英雄は偉大であり、無為である、と。

ここでも「類似性」と「媒介の欠如」が論理展開の糸として機能していることが確認できるが、注目したいのは多義性である。ボードレールの船のイメージが多義的であるのは、詩的言語本来の性格上不思議なことではない。しかしベンヤミンはその多義性を散文において多用するのである。例えばボードレールの「英雄」は、別のところでは「貧窮化した農民の子息からなる吹奏楽団」(p.183)であり、また「賃金労働者」(p.185)、「ごろつき」(p.193)であり、また同時に「ダンディ」(p.226)でもある。「英雄」というひとつの言葉に過剰な多様性を担うことが課せられているのだ。「遊歩者」も同様である。それは都市ブルジョワジーであり、あるときは犯罪者ともなり、目撃者ともなり、また探偵ともなる。横張誠は『パサージュ論』の解説において、ベンヤミンの用いる「現代性」という言葉が「とても同一の語に關す

るとは思えないほど」⁶⁾ の多義性を帯びていることを指摘して、「これは、ベンヤミンが、ズームレンズのように巧みに用いる道具立てと見た方がいいようだ。そう考えるのであれば、定義が三つも出てくることを理解するのは難しい」⁷⁾ と述べている。多義性を帯びた言葉を、対象によって焦点距離 (= 定義) を変えることができるズームレンズにたとえているわけである。しかしここでは、一つの語には一つの意味を持たせるべきだとする散文の基本原則、意味単一性にもとづく明証性といったものに、ベンヤミンがあえて背いているということを確認するにとどめたい。

「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」にとらえどころのなさという印象を与えるエクリチュールの特徴として、「類似」「媒介の欠如」「多義性」の三つの要素を確認した。それらは、比較による空間的認知、因果論による実証性、意味単一性による明証性を阻害するものとして機能していた。またそれらの特徴は、ベンヤミンがボードレールの特徴として指摘したのもでもあった。いわばベンヤミンがボードレールから借用した道具立てなのである。では、なぜベンヤミンはそのような方法を使おうと考えたのだろうか。そのヒントを、「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」にもとめてみたい。

「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」

「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」が社会研究所紀要への掲載を拒否されたため、ベンヤミンは新たに「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」を執筆した。この主要な部分は「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」の第二部「遊歩者」をベースとして書き直されたものだが、全体の 12 章のうち冒頭の 5 章は新たに書き加えられたものである。この冒頭部分は結論として、ボードレールの「いかなる作品においても群衆がモデルとなりはしなかった。しかし群衆は隠れた形象として彼の作品に埋め込まれている」(p.267) というテーゼを提出し、本論への導入の役割を果たすものである。しかしながらここで中心的に論じられているのは、過去から「真なる経験」を蘇らせることはいかにして可能かという問題である。つまり歴史叙述にかかわる哲学的考察なのである。

ベンヤミンはまず生の哲学者、ディルタイ、クラークス、ユングの名を挙げた後に、ベルクソンの記憶論を取り上げ、本質的な経験は、追想によって固定化した事実の集積からなる歴史的な経験にたいして目を閉じることではじめて立ち現れるという理論を紹介する。次に、ベルクソンの理論を修正しつつ実践したプルーストを取り上げ、プルーストが意志的な追想と無意志的な記憶を対置させ、意志的な記憶

が提供する情報には過ぎ去ったもの自体が少しも含まれておらず、過ぎ去ったものは理知の領域の外、理知の作用の及ばないものにしか見いだすことができないと考えていたことを紹介する。さらにベンヤミンはフロイトの理論を検討する。それによると意識化は刺激に対する防衛機能であり、記憶の破壊として機能する。したがって記憶の残滓を収集するためには、意識とは別の体系によらなければならない。最後にベンヤミンは心的メカニズムに関心を持ち、フロイトとほぼ同じことを考えており、なおかつボードレールと直接つながる詩人でもあったヴァレリーに言及する。

この「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」の冒頭に新たに書き加えられた部分は、執筆に時間の余裕がなかったからか、あるいはアドルノの無理解に対する啓蒙的な配慮なのか、ベンヤミンにしてはいささか図式的と感ぜられるが、そのおかげで問題意識がはっきりと読み取れる。つまり真の経験を呼び覚ますためには、理知による意志的記憶とは別の体系によらなければならない。その体系はベルクソンとフロイトの理論に基礎を持ち、ボードレールとプルーストの実践が生み出した方法によるものである、と。

また、ここでは主に個人の記憶に関する議論が取り扱われてはいるものの、明らかにベンヤミンは集団の記憶としての歴史を意識している。というのも、プルーストを論じる際に、新聞と物語を対比させ、ジャーナリスティックな情報の原則が経験から遮断するものであるのに対し、物語が出来事を報告者の生のなかに沈めることができることを述べているからである。ここには、記憶痕跡を抹殺するジャーナリスティックな言語と、語り手の痕跡を残す物語言語を対比する、歴史叙述言語の質にかかわる問題意識を見ることができるだろう。

「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」が執筆されねばならなかった経緯を考えれば、この新たに書き加えられた冒頭部分がアドルノに対する応答という意図を持ち、みずからの歴史叙述の方法の根拠を示すものであったと考えるべきであろう。

おわりに

ベンヤミンはアドルノに宛てた書簡のなかで次のように書いている。「ひとこと、率直なところを付け加えさせてほしい。この「ボードレール」論は、これまでにはあまり例がないほどの文学的努力の所産なのだ⁸⁾。この「文学的努力の所産」が意味するところは、いまや明らかであろう。それはボードレールの方法によって第二帝政期パリの歴史を叙述することである。しかし、何がベンヤミンをしてそのよ

うな努力に向かわせたのかという疑問が立ち現れる。それについては、ベンヤミンが死の直前まで手を入れていた、あの晦渋な「歴史の概念について」に赴かねばならないであろう。これは1939年8月、ドイツとソビエト連邦が不可侵条約を結んだことをきっかけとして、危機的な歴史認識の色彩を強めるものへと変わったのだが、出発点はボードレー論第三部に置かれるべき歴史叙述の方法論として書き始められたものであった。出発点の痕跡を探すことは容易ではないが、例えば「テーゼ1」で、チェスの試合に必ず勝利する自動人形を紹介した後に、「哲学においてこの装置に対応するものを思い描くことができる。〈史的唯物論〉と呼ばれるその人形は、いつでも勝利を収めることになっている。神学の助けを借りていれば、この人形はどのような相手とも楽々とわたりあうことができるのだ」⁹⁾と続けるとき、そこには歴史を出来事を因果的叙述によって継起するものとする「神学」にたいする批判を読み取ることができるだろう。

注

- 1) 本論で引用するベンヤミンの二つのボードレー論、「ボードレーにおける第二帝政期のパリ」、「ボードレーにおけるいくつかのモチーフについて」はヴァルター・ベンヤミン『パリ論／ボードレー論集成』浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、2015 に収録された久保哲司訳により、出典個所は引用後に（ ）で示す。またフランス語訳は Walter Benjamin, *Charles Baudelaire*, traduit par Jean Lacoste, Petite Bibliothèque Payot, 2011. を参照した。
- 2) H.ローニツ編『ベンヤミン／アドルノ往復書簡』(下) (野村修訳、みすず書房 2013) p.152.
- 3) *ibid.*, p.167.
- 4) *ibid.*, p.154.
- 5) *ibid.*.
- 6) ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論Ⅱ』岩波書店、1995、p.390
- 7) *ibid.*, p.396
- 8) H.ローニツ編前掲書、p.172
- 9) ヴァルター・ベンヤミン『歴史の概念について』鹿島徹訳・評注、未来社、2015、p.44